Evolution, Ethics, and R. L. Stevenson's Dr. Jekyll and Mt. Hyde

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/460

『ジーキル博士とハイド氏』における進化と倫理の言説

山本　卓

Evolution, Ethics, and R. L. Stevenson's *Dr. Jekyll and Mr. Hyde*

Taku YAMAMOTO

『ジーキル博士とハイド氏』(*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886) を、スティーヴンソンの他の物語と比較したときに気づくのは、この作品の批評が多方面から寄せられていることであろう。『スティーヴンソン批評伝』(*Robert Louis Stevenson: The Critical Heritage*, 1981) に収められているものだけでも、文芸批評家による批評はもとより、『パンチ』誌のパロディ、宗教雑誌における作品評価、そしてF. W. M. マイヤーズとスティーヴンソンの間に交わされた心理学的見地からの物語考察と多岐にわたる[1]。

人間における善悪の葛藤とその結果の破滅という古典的な教訓話にもかかわらず、『ジーキル博士とハイド氏』が当時の読者に大きなインパクトを与えたのは、簡潔な物語構成や人物描写の巧妙さといった技巧的要素に負うところが大きい一方で、作品が社会的な背景を喚起する側面を持ち合わせていることも見逃せない。当時の批評に目を向けても、ジュリア・ウェッジウッドは主要登場人物が全て独身男性であることについて、「スティーヴンソンは、より凝縮したかたちで現代の民主主義が持つ個人化の影響を表現している」と、物語の時代性に言及しているし[2]、上記のマイヤーズはスティーヴンソンに対して、二重人格者の二つの人格が書いたそれぞれの筆跡が決して一致しないことを、黎明期にあった「精神物理学の議論」に基づく考察の結果として指摘する[3]。『ジーキル博士とハイド氏』が暗示する時代性のなかでも特に重要なものは、ジーキルがハイドへと変身することによって生じる人格の退行が、1880年代から90年代にかけて人々が抱いた退化への恐怖感と呼応することではないだろうか[4]。社会的地位の高い人物が己の欲望によって破滅を被るという物語が、陳腐な教訓譚にならなかったのは、そこに進化論という言説を包含していたことも大きく作用しているのではないか[5]。本論では、『ジーキル博士とハイド氏』を取り巻く背景として進化論に着目し、物語と進化論の接点を探る。とりわけこの小説における、善悪の二項対立の形成に寄与する物語展開と、その成立を阻む流れの存在という矛盾する二つの方向性が、進化と倫理にまつわる19世紀末の言説に深く関わっていることを指摘しようと思う。

I

『ジーキル博士とハイド氏』が出版される3年前、雑誌『マインド』(*Mind*) において興味深い議論が交わされている。「純粋な悪意といったものがあるのか」と名付けられたこの論争は、純粋な悪意の存在を確信するアレグザンダー・ベインと、人間性の中にはそのような悪意はないとするフランシス・ブラッドリーによって行われている。そもそもの発端はベインがレズリー・スティーヴンの『倫理の科学』(*The Science of Ethics*, 1882) についての書評の中で、悪意に関するスティーヴンの見解を批判したことにある。

平成13年10月1日受理

He [Leslie Stephen] takes the bull by the horns, and boldly affirms that the pleasure of Malevolence is, with some exceptions, not a real fact, but an incidental accompaniment of some other facts. . . . Dr. Chalmers before him wrote a dissertation entitled—— "The Inherent Misery of the Vicious Affections," and maintained that malevolence generally, while being incidentally pleasurable, is intrinsically painful. I contend for the very opposite; and hold that malevolence is intrinsically one of our intensest pleasures, and only extrinsically and incidentally painful. I believe, moreover, that to get at the exact truth on this question is of vital importance in all socilogical as well as ethical reasonings.[6]

20ページ程度の書評のうち、純粋な悪意についてのベインの記述は全体の約3分の1余りを占めている。ベインが『倫理の科学』を概ね好意的に評価していることを考慮すると、この量は彼の「悪意」に対する執着の強さを表すだろう。チャーマーズ同様、スティーヴンが悪意は本質的に苦痛であり、悪意による喜びの感情は付随的であると主張するのに対して、ベインは悪意の根本には常に愉楽が存在し、苦しみこそが副次的な現象だと規定している。その理由として、この哲学者は全く関係のない人が苦しんでいる姿を見て喜ぶ人々を挙げる。さらに、この種の快感は「我々の性質のなかで最も早くから顕在化するものの一つ」であり、「子供が残酷な行為に喜びを感じるような事例」は枚挙にいとまがないとベインは述べる[7]。

ベインの主張に対して、ブラッドリーは人間の内面に巣くう「権力愛」の重要性を強調し、純粋な悪意の存在を否定する。ブラッドリーの仮説においては、「我々が支配できる領域の拡大」こそが重要で、飽くことを知らないこの欲望は、悪意に付随する快楽に先行する。したがって、ある人間がそのライバルをいたぶるなどといった行動は、行為者自身の力の及ぶ範囲を確認することにおいて有効になる。敵を完全に弄んでその苦痛を切望する場合でも、「我々の残酷さには積極的な理由があり、我々の悪意は決して『純粋』ではあり得ない」とブラッドリーは締めくくる[8]。しかし、そもそもベインが、権力を悪意とは独立した別の次元の要素として考えている点において、両者の前提は根本的に異なる。そのためブラッドリーへの反論においても、ベインは彼の主張の根拠として、他人への理由のない嫌がらせといった例を繰り返し、二人の議論は平行線を辿る。

奇しくも、『ジーキル博士とハイド氏』において、我々はベインが論じる「権力欲とは無縁の悪の存在」を見いだすことができる。ジーキルは、彼の分身であるハイドを「純粋な悪 (pure evil)」(61) と形容し、カルー卿を殺害したときの激情を以下のように分析する[9]。

I declare at least, before God, no man morally sane could have been guilty of that crime upon so pitiful a provocation; and that I struck in no more reasonable spirit than that in which a sick child may break a plaything. . . . Instantly the spirit of hell awoke in me and raged. With a transport of glee, I mauled the unresisting body, tasting delight from every blow; and it was not till weariness had begun to succeed that I was suddenly, in the top fit of my delirium, struck through the heart by a cold thrill of tenor. (67)

ジーキルの描写がベインの主張と共通するのは、純粋な悪に基づく行為が「病気の子供が玩具を壊す」ことに喩えられていることである。行きずりの老議員に暴力の限りを尽くす時に、ハイドが体験する「歓喜」や「狂喜」といった快楽は、ベインが論じるところの権力の拡大を伴わない悪意の行使の具体例となる。むろん純粋な悪の体現者というイメージは文学においてとりたてて珍しいものではない。『聖書』のサタンにまでも遡ることができるように、悪の擬人化は広範に渡って普及

した文学上の手法でもあるため、ハイドの表象と哲学者の議論の共通点だけに注目して、文学テクストとその外部にある言説との一致を指摘することは短絡的であろう。しかしながら、ここで確認しておきたいのは、ベインが純粋な悪意の存在を問う契機となっている『倫理の科学』が、進化と倫理との関係を論じた著作だという事実である。『倫理の科学』は、自由放任主義において集団の倫理が自ずと好ましい方向に向かうというハーバート・スペンサーの主張に対して、社会的な有効性という概念を用いて進化と倫理の関係を明らかにするという試みである。書評の中でも倫理と進化について言及しているように、ベインの主張は、19世紀の進化論を取り巻く言説の一環として出現したものなのである。これらの議論の背後に存在する進化というディスコースに注目するとき、テクストにはその外部のイデオロギーとの接合を示す兆候が顕在化する。

II

進化の視点から『ジーキル博士とハイド氏』を読解すれば、物語の進行に伴って、ハイドの表象が人間から動物へと退化していることに気づく。ハイドがテクストに登場する場面では、彼は紳士として扱われている。彼が深夜の路上で少女を踏みつけて立ち去ろうとしたとき、エンフィールドは少女への乱暴の補償としてハイドに100ポンドを要求する。そもそも100ポンドもの金額は、ハイドがそれだけの支払い能力を持つという認識がなければ決して出てこない請求額である。しかも賠償金の要求が、ハイドの「ことが騒ぎになるのを望む紳士はいない」（5）というせりふの後に続いて行われていることを考えると、嫌悪感をもよおさせるハイドの外見にもかかわらず、エンフィールドたちは彼を紳士として扱っていることになる。逆に、「この事件から君たちが大金をせしめるつもりならば」（4）というハイドの発言は、あたかもエンフィールドらがハイドを脅迫している印象すら与える。

しかし、アタソンがハイドと対面し、その後の記憶で彼のことを反芻するときには、ハイドは「先史時代の穴居人のようなもの」(14) という性質を有した存在へと変化する。そして、偶然にもハイドが殺人を犯す現場に居合わせたメイドは、ハイドがカルー卿を踏みにじる様子を「猿のような怒り」(21) に駆られたものだと振り返るのである。さらに、ハイドの退行は物語の最後におけるプールの語りによって一層強調される。ジーキルの部屋に立てこもる謎の人物を、ジーキル家の執事は「彼か、それ[it]か、もしくはその部屋にいるものがなんであれ」(40) と述べ、それが人間以外の存在であることを仄めかす。アタソンとしばらく議論を交わした後、プールは猿の要素を持ち合わせた人物がハイドであると断言する。

> 'Quite so, sir,' returned Poole. 'Well, when that masked thing like a monkey jumped up from among the chemicals and whipped into the cabinet, it went down my spine like ice. O, I know it's not evidence, Mr. Utterson; I'm book-learned enough for that; but a man had his feelings; and I give you my Bible-word it was Mr. Hyde!' (42)

プールによるハイドについての段階的な叙述の仕方は、物語の前端部でアタソンやメイドによってなされたハイドの変化に呼応する。穴居人の洞窟を連想させるジーキルの部屋でうごめく人間を超えた存在は、最後に「猿のようなマスクをつけたもの」へと変化するのである。最初紳士として物語に登場するハイドは、最終的には猿となる。

物語の冒頭では少女を踏みつける程度であったハイドの嗜虐的な傾向が、カルー卿の撲殺へとエスカレートする様子は、退行に伴ってハイドの倫理が低下することを仄めかす。しかも、アタソンがハイドを目撃したときに抱く「汚れた魂が肉体の外ににじみ出て、その肉体の姿を変える」(14)という感想に代表されるように、『ジーキル博士とハイド氏』というテクストは、内面と外面の一致を繰り返し読者に提示するのである。例えば、ラニョンは身体に合わない服を身につけているハイドを見て、「彼の服装の不釣り合いは、そういったもの［彼の本質］に合っていて、強調していた」(53) と述べているし、彼の内面と外面の相同性はジーキル自身の告白においても語られている。

> Now, however, and in the light of that morning's accident, I was led to remark that whereas, in the beginning, the difficulty had been to throw off the body of Jekyll, it had of late gradually but decidedly transferred itself to the other side. All things therefore seemed to point to this: that I was slowly losing hold of my original and better self, and becoming slowly incorporated with my second and worse. (65-6)

時間の経過に伴って、ジーキルはハイドからジーキルに戻ることに困難さを覚えるようになる。この引用で注目したいのは、ハイドの悪の性質がジーキルに浸食していることである。ハイドがその力を増すにつれて、ジーキルの良心は弱体化し、その結果ジーキルの肉体が変化を被る。徐々に良心を失うジーキルには、ハイドの肉体こそが相応しくなるのである。

さらに、内面と外面の一致は、ハイドを取り巻く空間の表象によっても示唆されている。当初、ハイドはジーキル邸をその住居としているが、エンフィールドとの事件の後、ソーホーへと住処を変えている。ハイドの部屋の管理人は、アタソンが一瞥して「邪悪な顔つき」(23) と感じる老婆であるし、彼女の守る家の扉の外には混沌とした町並みが広がっている。

> As the cab drew up before the address indicated, the fog lifted a little and showed him a dingy street, a gin palace, a low French eating-house, a shop for the retail of penny numbers and two-penny salads, many ragged children huddled in the doorways, and many women of many different nationalities passing out, key in hand, to have a morning glass; and the next moment the fog settled down again upon that part, as brown as umber, and cut him off from his blackguardly surroundings. (22-3)

霧を通して一瞬だけ弁護士の視界に入る世界は、ロンドンの中の異空間である。安酒場やフランス料理店が、彼の好む年代物のワインが添えられるテーブルとはかけ離れた場所であることを示唆するし、「朝酒のために手に鍵を持って出ていく様々な国籍の女達」は、この界隈の住民が欲望のままに行動することを暗示する。通りを過ぎるときのアタソンの状況も、アタソンとソーホーの街とのコントラストを際だたせている。アタソンは馬車という閉じられた空間にこもり、彼を警護するかのようにその横には警部が付き添う。ハイドのアパートを取り巻くのは、ハイドの性質に似通った退廃の街であり、アタソンが一人で入るには危険すぎるのである。

これまで検証したように、ハイドを表す記号の変化と彼の凶暴性の激化との呼応によって、このテクストが、進化の程度と倫理の高低の関係を示した19世紀のディスコースの一つであると解釈できるかもしれない。ここで我々が気をつけなければいけないのは、『ジーキル博士とハイド氏』における進化と倫理の言説は、内面と外見の一致を強調するテクストのレトリックがあってこそ前景

化することであろう。物語がそのレトリックにおいてジーキルからハイドを切り離し、それぞれを善と悪に単純化することで、進化の程度と倫理の発達段階の合致が導き出されるのである。

しかしながら、『ジーキル博士とハイド氏』にはそのような二項対立の成立を阻む要素も存在する。上で言及したハイドの隠れ家の趣味は、彼の野蛮な性質とは齟齬をきたす。

> In the whole extent of the house, which but for the old woman remained otherwise empty, Mr Hyde had only used a couple of rooms; but these were furnished with luxury and good taste. A closet was filled with wine; the plate was of silver, the napery elegant; a good picture hung upon the walls, a gift (as Utterson supposed) from Henry Jekyll, who was much of a connoisseur; and the carpets were of many plies and agreeable in colour. (23)

ハイドの部屋から発見されるワイン、銀器、そして上品なテーブルリネン類は、テクストにおいてジーキルやアタソンの食卓にこそ置かれるものであり、野蛮なハイドが所有するには相応しくないように思われる[10]。ソーホーのアパートにはハイドの姿で入り、それからジーキルに戻って彼がこれらの「贅沢な品々」を満喫したという可能性もあるが、既にジーキル邸には同様の部屋が存在する。そうすると、これらの贅沢な品々を満喫していたのは醜悪な外見を持つハイドということになる。

ハイドの趣味とジーキルの嗜好との共通は、とりもなおさずハイドの上位中流階級的な面を明らかにする。アタソンに向かってエンフィールドが、ハイドの後見人について「礼節の極致であり、高名で、そして（困ったことには）いわゆる善行を果たしているあなた方のお仲間の一人」（4）と説明するように、テクストにおいてはアッパー・ミドルクラスと善行が緊密に結びつけられている。この現象を進化と倫理の関係において考えると、階級の高低と進化の程度が対応していることになるのだが、ハイドの趣味はこの対応関係を否定する。ハイドの気品にあふれた趣味と野蛮な性質の間の矛盾は、これまで我々が指摘してきた進化と倫理の相関関係の妥当性に疑問を投げかけるのである。また、ハイドがジーキルの負の部分であることは、その抑制が外れたときに残虐さに向かう純粋な悪意が、進化したはずの人類の中に潜んでいることを意味する。このように考えると、『ジーキル博士とハイド氏』の読解において、19世紀の進化論の言説を援用することは、テクストに内在する二つの矛盾した相を提示することになる。一つは、進化の段階と倫理の高低を対応させる善悪の二項対立へと向かう相であり、もう一つは、テクストにおけるその二項対立を瓦解させるばかりでなく、進化した人類が抱える矛盾を暴く相である。しかし、再び当時の進化論に目を向けるとき、進歩したはずの人間における相矛盾した性質の説明を企てた言説が存在することに気づく。

III

進化と倫理の関係というテーマは、前述したレズリー・スティーヴンの『倫理の科学』を始めとして、当時、様々な著書や論文によって論じられている[11]。ハクスリーの『進化と倫理』（*Evolution and Ethics*, 1893）も、このような思想的潮流を反映した著作として位置づけられるだろう。『進化と倫理』における彼の目的は、人間の利己的な性質と利他的な傾向という相反する二つの要素に合理的な説明を加えることにある。

生存競争の原理においては、自己の保存が最大の関心点となる。しかし、人間が自己の欲求のま

まに個人の領域を拡大すれば、それは共同体の発展に不都合をもたらしてしまうため、利他的にならざるを得ない。この問題を解決するために、ハクスリーはまず進化を「宇宙過程（the cosmic process)」と「倫理過程（the ethical process)」という二つのカテゴリーに分類する。宇宙過程の「最大の特徴の一つは生存競争」で、そこにおいては環境に適合している点でのみ最適者が決定される[12]。論を展開するにあたってハクスリーは植生の比喩を用いており、ある植物が他の同じような植物と生存競争を繰り広げた結果、自然状態（the state of the nature）で生き残るとき、そこにおいて作用しているプロセスを宇宙過程と呼んでいる。一方、彼は倫理過程についても園芸に喩えて説明を試みる。庭は「人間によって『自然の状態』の中に作り出された『人為の状態（the state of Art)』」で、そこでは自然における生存競争の原理が作用しない[13]。ハクスリーによれば、人類は進化のある時点で自然の状態から人為の状態へと移行したことになるのである。その理由として、彼は医者の役割を挙げる。もし人間が宇宙過程に完全に支配されている存在ならば、生存競争に不適格な病人を治療する「医学は邪悪な魔術」と見なされるはずである[14]。しかしながら、現実において人間は他人に対する配慮を持ち併せてきたし、協力して共同体を形成してきた。それは人類が人為の状態を作りだしたからに他ならず、そこにおいて「人間社会の原初的な絆の大半を形成され、それは我々が良心と呼ぶところの組織的で人格化された共感に至る」倫理過程が生じるのである[15]。そして、「たまたま［任意の環境において］最適者となったものを生き残らせることではなく、（中略）倫理的に最良のものを残す」倫理過程の原理は、自然状態の生存競争を機能させないという点において宇宙過程の原理と対立関係を形成する[16]。これがハクスリーの進化論における、人類の利己的傾向と利他的傾向との間に生じる相克の解決方法なのである。つまり、彼は利己的傾向が顕著な状態を自然の状態と規定し、利他主義が優勢を占める場を、人類が進化を遂げた段階と判断するのだ。

ハクスリーの概念が思想的影響関係にあるダーウィンやスペンサーのものと異なるのは、ハクスリーが生物学的進化と倫理の向上を別のものとして扱った点にある。ハクスリーの師であるダーウィンは、『人間の由来』(*The Descent of Man*, 1871）において、利己主義に対する利他主義の優位性を人間の根本的な資質として考察する。

> Most savages are utterly indifferent to the sufferings of strangers, or even delight in witnessing them. . . . Some savages take a horrid pleasure in cruelty to animals, and humanity is an unknown virtue. Nevertheless, besides the family affections, kindness is common, especially during sickness, between the members of the same tribe, and is sometimes extended beyond these limits. . . . Many instances could be given of the noble fidelity of savages towards each other, but not to strangers. . . .[17]

他の部族に対しては容赦ない未開人も、仲間の部族には親切心という利他精神を発揮することを、ダーウィンは「高貴な忠誠心」と表現する。ルソーを連想させるこの言葉をダーウィンが用いたのは、未開人と文明人が本質的な性質を共有するという事実を、ヴィクトリア朝の読者に抵抗なく納得させるための論法と考えられるかもしれない。しかし同時に、この言葉遣いは「親切心」や「人間らしさ」という利他的な感情の程度が、文明の発達によって向上することを予期させる。

> Sympathy beyond the confines of man, that is, humanity to the lower animals, seems to be one of the latest moral acquisitions. It is apparently unfelt by savages, except towards their pets. . . . This virtue, one of the noblest with which man is endowed, seems to arise incidentally from our sympathies becoming more

tender and more widely diffused, until they are extended to all sentient beings.[18]

ダーウィンにとって文明の発達の指標とは、共感の範囲なのである。動物に対する虐待は、人類が進歩するにしたがって思いやりの気持ちへと変化する。ただし、ここで述べられている彼の観測は非常に楽天的なものであろう。「全ての感覚のある生物にまで広がる」共感という言葉からは、楽園の光景さえ思い起こさせる。

他方、ハクスリーの倫理に関する議論はより悲観的である。彼は「ロマネスク講演」において、人類の進化には必然的に倫理の向上が伴うとする倫理の進化論を批判し、人間の利己的な性質が進化によって衰微するのではなく、反社会的傾向として我々の中に留まり続けると主張する。

For his successful progress, throughout the savage state, man has been largely indebted to those qualities which he shares with the ape and the tiger; his exceptional physical organization; his cunning, his sociability, his curiosity, and his imitativeness; his ruthless and ferocious destructiveness when his anger is roused by opposition.

But, in proportion as men have passed from anarchy to social organization, and in proportion as civilization has grown in worth, these deeply ingrained serviceable qualities have become defects. After the manner of successful persons, civilized man would gladly kick down the ladder by which he has climbed. He would be only too pleased to see "the ape and tiger die." But they decline to suit his convenience. . . .[19]

このような進化論は、無干渉に徹していれば自ずと最良の倫理に向かうというスペンサー的な進化論とも一線を画す[20]。また、ハクスリーの仮説は人類にユートピアのような未来像を無条件には約束しない。人間が倫理過程に達したとき、宇宙過程においては生存競争の切り札となった「猿や虎と共有する」様々な野蛮な性質が、逆に欠点へと変化する。しかもその欠点を我々は切り離すことができないのである。倫理過程の原理と宇宙過程の原理の相克は我々の中に存在し、人類は「この世界が続く限り、この粘り強く強力な敵を抑える」ことを要求され続ける[21]。したがって、人類という種が発展するためには常に自己抑制が伴うのである。

ここにおいて、ベインとブラッドリーの「純粋な悪意」をめぐる議論が平行線を辿った理由を、我々はハクスリーの進化論モデルの中に突き止めることができるだろう。ブラッドリーが主張した「権力の拡大が伴う悪意」とは、ハクスリー進化論では自然状態で有効な性質に相当し、ベイン的な「権力とは無関係な悪」は倫理状態における悪意となる。自然状態では利己的な欲望が、自己の生存という報酬を得ることができる一方で、倫理状態においてはそういった利己的な欲望はむしろ共同体の発展の弊害となる。それゆえ、進化の初期の段階において権力の拡大が伴った悪意は、人類が進化するにつれて純粋な悪意へと変化するのである。ベインの悪とはハクスリーが彼の進化論で論じる人間の残虐性であり、進化した人間が常に戦わなければならない古代からの特質なのだ。時代的にこれら二つのテクストの間に位置する『ジーキル博士とハイド氏』において、ジーキルが生涯にわたって苦悩してきた彼の負の性質とは、まさにこの人間の中に潜む野獣に他ならない。

『ジーキル博士とハイド氏』の中でハイドの行動の表象に用いられる動物の比喩は、ハクスリーの指摘する「猿と虎」に相当するだろう。そして、ハイドによるカルー卿の殺害は、単なる残酷な殺人事件という位置づけに留まらず、高度に進化した人類に対する野獣の攻撃として浮かび上がる。事件を目撃するメイドの視点から語られるカルー卿は、「白髪の上品な老紳士」で、その顔には「純

粋で古風な善意が表れており、それでいて十分な根拠に裏付けられた自負心のような、なにかしら高貴なもの」(20) に満ちている。ハクスリー的な進化論から検証する場合、とりわけ重要になるのは、カルー卿の顔に見とれるメイドが、その夜「全ての人々に対してこんなに平和な気持ちになったことがないし、世間をこんなに優しい気持ちになったことがない」(20) と証言していることである。彼女の気持ちは、事件が起こる夜が平和の極致、すなわち野蛮な生存競争から完全に隔離された世界だということを示す。そういった世界において彼女が見とれる老議員は、人類の進歩が提供する最良のものを体現することになるだろう[22]。カルー卿殺人事件がロンドン中を震撼させるのは、彼の殺害が、倫理の状態に自然状態の原理が持ち込まれたことを意味するためなのである。

ハイドがその利己性から犯す反社会的な行為を補償するための手段として、ジーキルが慈善活動という利他的な活動を採択することも、ハクスリーの進化論との符合を示唆する。ジーキルは倫理過程の原理に基づいて、利他精神を発揮する。最終的にジーキルが被る悲劇は、彼が内包した「猿と虎」の性質を抑止できなったことによって生じるのであり、彼の自殺は倫理過程における不適格者への懲罰として解釈することが可能となる。ジーキルの発明した薬は、人類が包含する倫理的な矛盾についてのハクスリーの仮説を、アレゴリカルなかたちで我々に垣間見せるのである。

IV

我々は純粋な悪の存在を唱えるベインから出発し、ハクスリーによる進化と倫理のモデルが、『ジーキル博士とハイド氏』における相反するベクトルを成立させる言説になりうることを検証してきた。しかし、作品においてはジーキルとハイドは結局のところ一人の登場人物であり、彼（ら）の処罰を正当化する物語の倫理基準が必要となる。そして、ジーキル/ハイドと対照をなすアタソンこそが、その役割を担っているのである。

アタソンは自己には厳しく、他人には寛容な人物として語られる。アタソンを特徴づけているのは、彼の欲望に対する過剰なまでの抑制傾向である。彼がジンを飲むのは「年代物のワインに対する自分の嗜好を制するため」であるし、観劇に関しても「この20年間劇場の門をくぐったことがない」（1）。日曜の夕食後には「無味乾燥な神学書を読み」、教会が12時の鐘を打つと「厳かに満ち足りた気持ちで床につく」（8）という、単調な生活を送っている。物語の語り手によれば「彼ほど不安なく人生を振り返れる人間はほとんどいない」にもかかわらず、ジーキルとハイドの関係を想像するとき、アタソン自身は「もう少しで犯しそうになったものの思いとどまった、多くのことに謹直で敬虔な感謝を捧げる」(15)。こうしたアタソンに関する記述を集めてみると、あたかもこの初老の独身弁護士が欲望を抹殺しているかのような印象を受ける。彼の節制の度合いは、彼をラニョンと比較したときにひときわ際だってくるだろう。

> The solemn butler knew and welcomed him; he was subjected to no stage of delay, but ushered direct from the door to the dining room, where Dr Lanyon sat alone over his wine. This was a hearty, healthy, dapper, red-faced gentleman, with a shock of hair prematurely white, and a boisterous and decided manner. At sight of Mr Utterson, he sprang up from his chair and welcomed him with both hands. The geniality, as was the way of the man, was somewhat theatrical to the eye; but it reposed on genuine feeling. （9）

食堂でアタソンが目撃するのは、一人でワインを嗜む旧友である。「喧しい」ラニョンは、アタソ

ンを見るや「どこか芝居がかっている」動作で彼を愛想良く迎える。アタソンの性格を物語るときに用いられた「ワイン」と「演劇」がここでも使われているが、これらの小道具は全く異なった性格の人物を表象するために使用されている。「群れなす患者」（9）を診察した後でワインを片手にくつろぐラニョンは、欲望の抑圧のためにアタソンが行う不断の努力を強調する。カルー卿が文明において理想化された存在ならば、アタソンは進化した人類の現実的な姿なのである。

アタソンによるこの欲望の抑制が彼の周辺へと向けられるとき、それは異質なものの拒否として発現する。テクストにおいて全ての登場人物と関わりを持っているのはアタソンだけであり、彼は様々な断片を組み合わせて事件の真相を知るに至る特権的な位置を占めることになる。しかし、読者の期待に反して、アタソンはこの特権を行使しない。例えば、ハイドが残した手紙の筆跡がジーキル博士のものと同一であることを知らされたとき、アタソンは衝撃を受けるものの、その後ジーキルに真相を問いただす様子はない。さらに、アタソンの顧客の一人が、それも彼宛の手紙を投函するために外出したときにハイドによって殺害されたにも関わらず、彼は「カルー卿の死も（中略）ハイドの失踪によって十分償われた」（30）と考え、それ以上の究明を保留する。ジーキル邸の中庭で目撃したはずの、ジーキルの顔の変化についても「恐ろしいことだ」（35）と言うだけで、それ以上の追求はしない。常に物事から距離をとる弁護士の姿は、彼の世界に外部のものが忍び込むのを頑なに拒んでいるように映る。

ただし、この弁護士は必要とあれば、容赦ない断罪者へと変貌する。物語の最後にプールの要請でジーキル家に赴いたアタソンは、ジーキルの部屋からの軽い足音や、変わり果てた声を聞いても、頑なに殺人という非日常的な現象を受け入れようとはしない。しかしながら、最終的に彼がハイドの復活を受け入れざる得なくなったとき、彼は火掻き棒という武器を持ってジーキルの部屋に押し入る。

> There lay the cabinet before their eyes in the quiet lamplight, a good fire glowing and chattering on the hearth, the kettle singing its thin strain, a drawer or two open, papers neatly set forth on the business table, and nearer the fire, the things laid out for tea; the quietest room, you would have said, and, but for the glazed presses full of chemicals, the most commonplace that night in London.
>
> Right in the midst there lay the body of a man sorely contorted and still twitching. (44)

アタソンとプールが乱入するジーキルの部屋は、非常に穏やかな雰囲気をたたえている。「燃えて、ぱちぱちと音を立てる暖炉の炎」や「お茶の準備」は、直前までその部屋の住人がくつろいでいたことを示す。アタソンはこの平和を破り、ハイドを自殺に追い込むのである。「その夜ロンドンで最もありふれた」部屋、すなわちアタソンが占有する世界に通じる部屋から、ハイドは追い出され、その姿を消す。こうしてアタソンは、あたかもハクスリーの述べるところの「園芸家」という、倫理過程の管理者の様相を呈するのである。園芸家が庭に野蛮な自然の痕跡を発見するとき、その排除こそが彼の任務となるのだ。

注

1　Paul Maixner, ed. *Robert Louis Stevenson: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1981) 199-231 頁を参照。
2　Maixner, 223頁。

3　Maixner, 215頁。

4　ポール・フェイターは1880年代のイギリス人が進化への期待と退化への恐怖を抱いていたことを指摘し、1890年代におけるゴールトンを中心とした優生学の誕生が、退行への恐怖を示すと解釈している。Paul Fayter, "Late Victorian Science and Science Fiction", *Victorian Science in Context*, ed. Bernard Lightman (Chicago: U of Chicago P, 1997) 262-7 頁参照。

5　クリス・フォスは、ハイドの退行が進化論的見地において動物と人間の境界を曖昧にする危険なものだと解釈する。スティーヴン・アラタによるロンブローゾ的な退行と犯罪者の関連の指摘も、テクストと進化論の関わりに基づく論考である。Chriss Foss, "Xenophobia, Duality and the Other Side of Nationalism: A Reading of Stevenson's *Jekyll and Hyde*", *Cahiers Victoriens et Edouanrdiens* 40 (1994): 67 頁。Stephen Arata, "The Sedulous Ape: Atavism, Professionalism, and Stevenson's *Jekyll and Hyde*", *Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts* 37. 2 (1995): 233-44 頁。また、近年の『ジーキル博士とハイド氏』批評においては、ジェンダー的考察がとりわけ目立つ。Marion Shaw, "'To Tell the Truth of Sex': Confession and Abjection in Late Victorian Writing", *Rewriting the Victorians: Theory, History, and the Politics of Gender*, ed. Linda Shires (London: Routledge, 1992) 87-100 頁。Janice Doane and Devon Hodges, "Demonic Disturbances of Sexual Identity: The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr/s Hyde", *Novel* Fall, 1989: 63-74 頁。William Veeder, "Children of the Night: Stevenson and Patriarchy", *Dr. Jekyll and Mr. Hyde: After One Hundred Years*, ed. William Veeder and Gordon Hirsch (Chicago: U of Chicago P, 1988) 107-60 頁。

6　Alexander Bain, "On Some Points in Ethics", *Mind* 29 (1883): 60-1 頁。

7　Bain, 62頁。

8　Francis H. Bradley, "Is There Such a Thing as Pure Malevolence ?", *Mind* 31 (1883): 417 頁。なお、このブラッドレーの意見に対する、ベインによる反論は以下の記事を参照のこと。Alexander Bain, "Is There Such a Thing as Pure Malevolence ?", *Mind* 32 (1883): 562-72 頁。

9　『ジーキル博士とハイド氏』に関するこの論文中の引用、および引用ページ番号はすべて *The Works of Robert Louis Stevenson* Tusitala Edition vol. 5 (London: William Heinemann, 1924)に基づく。

10　マイヤーズはスティーヴンソンへの書簡の中で、ハイドの趣味が不釣り合いに高すぎると指摘する。Maixner, 220頁参照。

11　例えば、1876年に創刊された『マインド』においても、とりわけ1880年代に進化と倫理を扱った議論が毎号のように掲載されており、当時のこのテーマへの関心の高さを伺わせる。

12　Thomas Henry Huxley, "Evolution and Ethics", *Evolution and Ethics: T. H. Huxley's* Evolution and Ethics *with New Essays on Its Victorian and Sociobiological Context*, ed. James Paradis and George C. Williams (Princeton: Princeton UP, 1989) 62 頁。

13　Huxley, 67頁。

14　Huxley, 95頁。

15　Huxley, 88頁。

16　Huxley, 139頁。

17　Charles Darwin, *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex* (Chicago: Encyclopedia Britannica, 1952) 315 頁。

18　Darwin, 317頁。

19　Huxley, 109-10頁。

20　『倫理学原論』における「進化の極致に達した人間は、彼の本性と一致するような社会に存在することになる。すなわち、自らが築き上げた社会環境と個々に調和するような、同じ性質の人々と暮らすことになる」というスペンサーの記述は、ダーウィンが想定したようなユートピア的な未来像を暗示する。Herbert Spencer, *The Principles of Ethics* vol. I (London: Williams and Norgate, 1883) 73 頁。

21　Huxley, 143頁。

22　ウィリアム・ヴィーダーは、カルー卿が弱い父のためハイドによって排除されると解釈するが、進化の観点から考えると、むしろ文明における究極の人間とみなす方が適切であろう。Veeder, 128頁参照。